

「シンガポールで開催された2つのコンベンション」

神谷 直亮

久しぶりに海外で濃密な時間を過ごした。6月上旬にシンガポールを訪れて、「Satellite Industry Forum2023 (SIF2023)」に参加し、「ブロードキャストアジア 2023」と「サテライトアジア 2023」を取材した。

Asia Video Industry Association (AVIA) が主催した「SIF2023」は、シンガポール市内の Voco Orchard ホテルを会場にして開催され、スカパー JSAT、Asiasat、Thaicom、Measat、Pasifik Satelit Nusantara (PSN)、Kasific Broadband Satellite などアジアを代表する事業者がそろって参加した。

目玉セッションは、「Regional Operators Roundtable : Where Do They Fit in This New World of Satellite」で、スカパー JSAT の森合裕グローバル事業本部長、Thaicom の Nile Suwansiri CEO、Asiasat の Raymond Chow CCO、PSN の Agus Budi Tjahjono Commercial Director が登壇した。

興味深かったのは、森合本部長がスペースコンパス社や QPS 研究所などを引用して、新規宇宙事業への拡大戦略を表明したのに対し、Nile Suwansiri CEO は、グローバルスター社（本社：米ルイジアナ州）やシンスペクティブ社（東京：江東区）との提携に触れ、現実的な低軌道周回衛星ビジネスやレーダー観測衛星分野への進出を強調した。また、同 CEO は、「9月に IPSTAR の後継機として大型の衛星を調達する予定」と語り会場の雰囲気盛り上げ

た。一方、森合本部長は、「今後 2030 年までに光データリレー衛星や HAPS に 11 億ドルの投資を行い、1 億 5000 万ドルの利益を上げる」と意気込みを強調した。

少々寂しかったのは、衛星メーカーによるセッションには、フランスの Airbus Defense and Space とアメリカの Boeing Satellite Systems International の 2 社しか出席しなかった。アジアでは、近いうちに打ち上げられる衛星がないと見たようだ。

筆者が期待した「Satellite-Cellular Convergence」のセッションも米国の Lynk Global 社の独演に終わった。同社によれば、「Cell-tower-in-Space」と呼ぶ同社が投入済みの 3 機の衛星を使って数社の Mobile Network Operator と End-to-End の実証試験を行っているという。

シンガポール政府のインフォコムメディア開発庁とイギリスのインフォーマテック社が共催した「ブロードキャストアジア 2023」の会場には、日本、アメリカ、カナダ、ベルギー、フランスなどの事業者が出展した。

日本からの出展者は、池上通信機、日立国際電気、キヤノン、富士フィルム、FOR-A、リーダー電子、メディアエッジ、ヴィレッジアイランドなど数えきれないくらい多かった。

池上通信機は、UNICAM XE シリーズの 4K/HD ポータブルカメラシステム「UHK-X700」と 4K アップグレード HD ポータブルカメラシステム「UHK-X600」を目玉にして出展した。ブースの担当者によれば、「UHK-X700 には、新開発のグローバルシャッター対応 2/3 型 CMOS センサーが搭載されている」とのことであった。「UHK-X600」については、「将来 4K 化を考えているアジアのユーザー向け HD カメラという位置づけで紹介している」と語っていた。

日立国際電気は、フル 4K カメラシステム「SK-UHD7000」を前面に押し出して出展した。ブースの担当者は、「小型軽量化、低消費電力化を実現し、4K 12G-SDI 出力、HDR/SDR 同時出力、広色域 BT2020 に対応している」と強調していた。同社のブースでは、この他に「150W to 300W RMP」をうたったデジタル TV 送信機が目についた。

キヤノンは、4500 万画素の静止画性能を有するという 8K デジタルシネマカメラシステム「EOS R5 C」を出展して、その多彩な性能をアピールしていた。そのひとつとして挙げたのが、「共存するスチールカメラシステムと 8K シネマカメラシステムをスイッチレバーで切り替えられる」という特色であった。

キヤノンは、この他に業務用 27 型 4K ディスプレイ「DP-V2730」を紹介して来場者を魅了していた。ブースの技術者は、「運用性の向上を図るために薄型、軽量化を進めたディスプレイではあるが、HDR 映像制作に適した高輝度性能を有し、広色域・広視野角にもしっかりと対応している」と PR に余念がなかった。

日本以外の出展者では、アメリカの Cobalt Digital、カナダの Ross Video、ベルギーの EVS、フランスの Viaccess-Orca などが目についた。パリに本社を構えるという Viaccess-Orca 社は、貴重なコンテンツの不正利用を防ぐデバイスを熱心にプロモートしていた。



写真1 AVIAが主催した「SIF2023」には、スカパーJSAT、Asiasat、Thaicomなどアジアを代表する事業者がそろって参加して賑わった。



写真2 池上通信機は、UNICAM XEシリーズの4K/HDカメラシステム「UHK-X700」を目玉にして出展していた。



写真3 キヤノンは、8Kデジタルシネマカメラシステム「EOS R5 C」を出展して、その多彩な性能をアピールしていた。



写真4 日立国際電気は、フル4Kカメラシステム「SK-UHD7000」を前面に押し出して出展した。

インテルサット、SES、カシフィック・ブロードバンド・サテライトの3社がゴールド・スポンサーになって開催された「サテライトアジア2023」の会場には、日本のスカパーJSAT、中国のチャイナサットコム、タイのタイコム、韓国のKTSat、マレーシアのミアサット、シンガポールのカシフィック・ブロードバンド・サテライトなど17社がブースを構え非常に賑わっていた。

中国のチャイナサットコム、韓国のKTSat、インテルサットと並び好位置に出展したスカパーJSATのブースでは、運用中の16機の衛星コンステレーションの売込みというよりは、スペースコンパス、QPS研究所、宇宙データセンター、AI、スペースRANなど、新領域のビジネスを大々的に取り上げてPRに余念がなかった。言い換えれば、衛星通信・衛星放送からさらに広範囲な宇宙ビジネスに進出しようという雰囲気濃厚であった。従ってブースの担当者は、スペースコンパス社の「スカイコンパス1」と名付けた光データ中継衛星のPRに余念がなかった。この衛星の狙いについては、「世界に先駆けて低軌道を周回する光学観測衛星やレーダー観測衛星の大容量データを中継して、地上局に送り届けるビジネスを確立する」と説明していた。本来の通信衛星に関しては、「フランスのエアバス社でスーパーバード9衛星を製作中で、2025年の打ち上げを目指している。この衛星の特色は、最先端のソフトウェア・デファインド・サテライトで、打ち上げた後に軌道上で衛星のサービスエリアや周波数割り当てをニーズに応じて変更できる」と強調していた。

チャイナサットコムは、「チャイナサット

ト26」「チャイナサット19」「チャイナサット6D」など総数17機の衛星を運用していると豪語しており、日本のスカパーJSATより1機多い。2023年2月に東経125度に打ち上げたばかりという「チャイナサット26」は、Kaバンドのハイスループットサテライトで、100Gbpsの通信容量と94を数えるユーザースポットビームを有しているのが特色である。カバレッジ図を見せてもらったが、中国本土、台湾はもちろんのこと、東はイランから西はニュージーランドまでカバーしている。

2022年4月に東経125度に投入された「チャイナサット6D」については、「Cバンド中継器のみ25台搭載して、主にテレビ番組の国内配信用に使用している」と語っていた。

最も興味深い新戦術を打ち出していた事業者としては、タイのタイコム社が挙げられる。同社は、現在タイコム4（別名IPSTAR）、タイコム6（別名Africom-1）、タイコム7（別名Asiasat-6）、タイコム8の4機の静止衛星で、アジア、オセアニア、アフリカ向けにビデオ配信、衛星放送、B-to-Bデータ通信サービスなどを行っている。同社は、これらの衛星ビジネスには将来性がないと踏んだのか、2022年3月末にアメリカのグローバルスター社とパートナーシップ契約を締結して業務の拡大を図る戦術に出た。目的は、低軌道周回衛星サービスを提供するグローバルスター社と組むことで、タイ国内および近隣諸国でのマルチオービットサービスの普及促進だ。具体的には、「タイ

国民の安心安全網の拡大、観光業者による海外からの訪問客のマネージメント、海洋ブロードバンドサービスの充実」を挙げている。

タイコム社の新戦術の第2弾は、今年5月初めに日本のシンスペクティブ社とパートナーシップ契約を締結して合成開口レーダー衛星「StriX」による地球観測データの取り扱いを始めた。同社によれば、「東南アジアにおける災害対応と環境モニタリングに貢献するが目的」という。

韓国の大手通信会社KTグループに属するKTSat社は、「コリアサット5A」を東経113度、「コリアサット6」と「コリアサット7」を東経116度、「コリアサット8」を東経75度で運用している。サービス内容は、衛星放送、ビデオ配信、「XWAVE-MVSAT」と名付けた海上移動体通信サービス、テレポートを拠点にしたマネジドサービスなど多岐にわたる。特色としては、「コリアサット7」衛星にフィリピンの衛星放送用のKuバンド成形ビームを搭載しているのと、ドイツとシンガポールに通信拠点となるテレポートを設置している点が挙げられる。同社の最近のホットな話題を聞いてみたら、「クラウドを駆使するneXat社（本社：ベルギー）のプラットフォームを使ってサービスポートフォリオの拡充を図っている。コリアサット5AのKuバンド中継器を使用し、iDirect社の技術を活用する最新のサービス」と答えていた。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト

SWE DISH

ニッサン新エルグランド4WD
5名定員
1.2m径・自動捕捉アンテナ搭載
車高2.2m以下（地下駐車場可）
3.6 KVA NMG アイドリリング運用
水圧エコ・ボール4m 搭載
強化サスペンション
国内（100V）海外（240V）対応
IPコントロール
ハイビジョン映像伝送
運転席からワンマンオペレーション

SMART SNG
HD TV, 3D TV and IP OVER SATELLITE. ECO OPERATION

スマート・サテライト・ニュース・ギャザリング

<http://www.bizsat.jp>

設計・製造・衛星通信のことなら
エーティコミュニケーションズ株式会社
TEL: 03-5772-9125

AI communications k.k.